
仮面ライダー000～Strikers&反逆のアンク～

爆睡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーOOOとStrikers&反逆のアンク

【Nコード】

N84090

【作者名】

爆睡

【あらすじ】

欲望・・・それはこの世に生を受けた誰もが持っているもの・・・
800年の眠りから目覚めたメダルの怪人・・・『グリード』。
コレは人の『欲望』を喰らう彼らに立ち向かう戦士のほんの小さな物語・・・

(前書き)

この作品をらいおんはーとのししおー氏の作品をヒントに構成しました。

初めての読み切りですが、生温かい目でご覧下さい。

「その欲望・・・解放しろ」

突然現れた緑色の虫の『怪物』は素晴らしいながら、偶然通りかかった女性の額に現れた『コインの投入口』のようなものに『銀色のメダル』を入れると、女性の身体からミイラのような怪人が現れた。

「!!!!!!!!!!」

女性は声にならない悲鳴を上げて気絶すると、怪人は標識やポストはたは電話ボックスや自販機を逆立ちして足で『丸めて』いき巨大な球体にしていくとその球体を美味しそうにバリバリと音を立てながら食べていく。

——チャリイイイイイン——

そしてその怪人が食べた球体はこの世でもっとも純粹なもの・・・『欲望』に変わり、怪人の体に溜まっていく。

それと同時に怪人Ⅱヤミの身体に小さなひびが入り始めていた。

——チャリイイイイイン・・・！——

——チャリイイイイイン・・・！——

「!!!!」

場所は変わってここはヤミ―が暴れている場所から5地区ブロック離れた公園の

木の上で昼寝をしていた黒髪に紫色の瞳の青年は突然起き上がる。

「セルメダルの音・・・ヤミ―か!『スバル』!!!!ん?」

青年は自分の近くにいる筈の相棒（一応）を探すが見当たらない

「ああ~~~~面倒くせえ!!! あいつまたどっかにいきやがったなあ
!!!」

青年はぼやきながら、懷から『緑色の缶』を取り出すと、上のプルトップを引き上げる。

カシャンカシャン!

すると、缶は『緑色のバツタ』を模した『バツタカンドロイド』に変形した。

「スバルを探して来い!!!」

青年はバツタカンドロイドに命令すると分かったのかカンドロイドは飛び跳ねながらその場を後にした。

一方、青年の居た場所から少し離れた噴水では・・・

「も・・・もうちょっと・・・動かないでね・・・今降ろしてあげるから
~~~~」

短髪に青髪の少女が木から降りられなくなった子猫を助けようと必死に手を伸ばしていた。

「お姉ちゃん・・・ミ―ちゃんを助けて・・・」

「ふにゃあ~~~~」

「大丈夫・・・あなたの友達はあたしが絶対助けるから・・・」

泣きそうな飼い主の少女に向けて勇気づけるよう少女が言った言葉は、

自分にも言い聞かせているように聞こえた。

「よしっ！！救助者確——パキッ！——ほえ？」

ようやく手が届いた思ったとたん聞こえた音に後ろを振り向くと、枝が自分の重みに耐えられずポッキリ折れた音だった。

「あ・・・」

「おねえちゃん！！」

このままだと噴水に落ちてしまう・・・  
かと思ったが、

「よっと！！！」

その少女は、バク転して勢いを殺しそのまま身体を捻って地面に降り立った。

「はい！100点！！！」

「「「おお~~~~~♪」」」

周りからは拍手喝采の嵐だ。

「ハイ、どうぞ！」

「ありがとう、お姉ちゃん♪」

「ニャアア~~~~~♪」

飼い主の少女に猫を渡すと少女は満面の笑顔でお礼を言った。

「どういた「コラー！！」いっ?！」

そこに警備員のおじいちゃんがやってきた。

「この木をポッキリやったのは嬢ちゃんかい!!！」

「あ・・・いや・・・これは・・・その~~~~~・・・」

「コレは天然記念物なんだぞ!!!!！」

「ゴメンナサ——イ!!!!」

「あっ!! 待てえええいっ!!!!!!!!!!」

少女は逃げ出した・・・

そのスピードはまるでメタ○ス○イムの如くだった。

警備員のおじいちゃんから全力で逃げてきた少女は公園の出口で漸く走るのを止めた。

「はぁ・・・怖かった・・・でも・・・後で謝んなきゃ・・・」

少女は日ごろから鍛えているのか、息一つ乱れていない。

——カシヤッ! カシヤッ! ——

と其処に、あの青年が放ったカンドロイドが少女の肩に止まった。

「あ・・・」

『『スバル』! ヤミーだ!』

「了解!」

カンドロイドから聞こえた相棒（一応）の声に青髪の少女「スバル」が答えると、ポケットから『銀色のメダル』を取り出し、目当てのモノを探す。

数メートル歩くと、目的のモノを見つけた。

黒い自動販売機だ。

スバルはその自販機のコイン投入口にメダルを入れると、中央の大きなボタンを押した。

——ポチッ! ガチャン! ガチャ! ガチャ・・・ブオオン! ——

すると、『黒い自動販売機』は『黒いバイク』に変形した。

スバルは付属のグローブとヘルメットをかぶるとハンドルを握る。

『『タカ』に案内させる。ついて来い！！！！』

「ピーイーイー！！！」

見上げると其処には小さなタカが・・・

タカは「ついて来い」というように飛んでいくと、スバルはその後を追った。

数分後、目的地に着いた。

スバルは息をのんだ。

なんと其処には巨大な玉がグルグルグルと回っていたのだ。

「遅いぞ！スバル！」

振り向くと木の上からスバルを見下ろす黒髪の青年。

「『アंक』・・・アレ何？」

スバルは相棒（一応）アंकに眼の前にある物体について聞いたです。

「アレはポストや標識、建造物をヤミーが丸めて作ったモノだ・・・見ろ」

アंकの指さした方角を見ると、ヤミーが標識を丸めてソレを転がしているのが見えた。

・・・とヤミーに異変が起きた。

なんと、身体中に亀裂が走り、ソレがはがれると中から身体中を、フンコロガシを模した装甲に笑った顔がついた『フンコロガシヤミー』へとかわった。

「ぐおおおおお・・・」

「脱皮したか・・・スバル！」

アंकは木から下りると右腕に赤い鳥を思わせる装甲がついた状態になり



スバルに向かって“赤・黄・緑”の三枚のメダルを投げる。

「もう十分メダルは溜まった・早くやつつけろ・

さもないと奴はあの玉で街中を破壊して回るぞ」

スバルは三枚のメダルを受け取る。

「いいの？」

「あ？何がだ？」

「だって何時もなら『もっとメダルが集まるまで放っておけ』とか言うじゃん」

そう、何時ものアंकならそういうだが、今日はちょっと事情が違った。

「今日は『40アイスクリーム』で先着100名に新作アイスの試食会があるんだよ・・・」

「え?!新作アイスの試食会!!ソレ本当!!」

「ああ、俺がこいつで調べた情報だ。間違いないだから、早く終わらせろ」

そう言って右手から情報端末を取り出し、スバルに見せた。

「了解!!待ってろ!!!試食会!!!」

この2人はアイス好きなのだ。

(っていうか、メダルよりアイスが優先なのかよ(汗))

(ソレに・・・仮にも『約束』した以上・・・一応守っておかないとうるさいからな)

約束・・・ソレはスバルがアंकとした契約・・・

メダルの大半を失い、右腕だけになったアंकは偶然出会ったスバルと

偶然この『身体』を手に入れた。

当初はアंकはメダルのみ優先していたが、その時スバルはアंकにある約束をさせた。

『約束して・・・人の命よりメダルを優先しない、

あたしが変身したいって言ったら、絶対変身させる』  
スバルの強引さにしぶしぶ了承し、アंकは現在その約束を『一応』  
守っている。

（全く面倒くさい奴だ・・・）

アंकが溜息をついているの知ってか知らずか、スバルはフンコロ  
ガシヤミーの元に

駆け寄ると、『穴が3つ』開いた四角いバックルを腰に装着。

バックルから自動でベルトが伸び身体に巻き付くと、バックルの穴  
の右側に『赤いメダル』

を、左側に『緑のメダル』、最後に真ん中に『黄色のメダル』を差  
しこむと、

右の丸い装置を取り外しながらバックルを左側に少し傾け、  
オースキャナー  
その装置でメダルの上をなぞった。

——キイン！キイン！キイイイイン！！！！——

そして、

「変身！！！！」

——タカ・トラ・バッタ！——

——タ・ト・バ！タトバ！！！！タ・ト・バ！——

歌のような電子音声がり響くと、スバルの姿が黒を基調にし、胸には円形のプレートが付いており、上から歌の通りタカ、トラ、バッタをモチーフにした絵が描かれており、顔はタカ、腕はトラ、足はバッタを思わせる。かつて、グリードを封印した存在・

“ オーズ ”

仮面らいだー<sup>オーズ</sup>○○○に変身した。

「はああああ！！！！！」

<sup>スバル</sup>○○○はフンコロガシヤミーを殴りつけるが、

——ゴイイイイイイイン・・・——

「・・・かったああ~~~~い・・・（涙）」

スカラベヤミーの装甲が想像以上に堅かったのか涙目になった。

「こん~~~~の~~~~！！！」

——ガン！ガン！ガン！ガン！——

「やっぱり駄目だ~~~~——ドゴン！——うぎゃ？！」

ヤケクソ気味で殴りつけるが効果は無く、しまいにはフンコロガシベヤミーの玉攻撃に

吹っ飛んでしまった。

「スバル!! コレを使い!!」

——チャリイイイイン! ——

「アंक! よ~~~~し!」

腕だけの状態になったアंकは新たな『コアメダル』を二枚投げ渡すと、

スバル  
○○○は真ん中の『トラコアメダル』と左側の『バッタコアメダル』を

アंकから渡された『カマキリコアメダル』と『チーターメダル』交換しスキャンした。

——タカ! カマキリ! チーター! ——

今度は歌が聞こえなかったが、腕にはカマキリの鎌を思わせる<カマキリソード>が

つき、足はチーターの脚力を宿した<チーターレッグ>に変わった。そして……

「たああああ!!」

——ズパパパパパパパパパパパパパパパ! ——

タカキリターの超スピードの連続攻撃が徐々にフンコロガシヤミの装甲を削っていき、その破片はセルメダルと化し、アंकは飛び散った破片メダルを集めている。

「さーて、とっとやっちゃいますか!」

スバル  
〇〇〇はそういいながら、またメダルをスキャンする。

——スキヤニングチャージ——

メダルをスキャンしていくとカマキリソードに力が溜まっていき、逆手に×の字を描く様に構える。

フンコロガシヤミーは身の危険を感じ自分が作った巨大な玉をスバル  
○○○に投げつけた。

迫りくる巨大な玉……このままで潰されてしまう。

だ  
が  
・  
・  
・  
・

ズパ  
アア  
アア  
アア  
アア  
アア  
アン!!!

「ぎゃあああああ？！？！」

——ドゴオオオオオオオオオオ——

次の瞬間、オーズ○○はチーターレグの超スピードで玉をスカラベヤミーンと

切り裂き、フンコロガシやミーは爆散した。

「無い！！俺の身体がない！！」

自分が借りている身体に戻り、アイスを食べに行こうとしていたア

ンクは

身体があつた筈の場所を見て『青く』なった。

「え？ちよつとなんで?!」

スバルも探すが見つからない。

とそこに、

——ピーポーピーポーピーポー!——

2人の耳に救急車のサイレンが遠ざかっていく。

「いまの救急車・・・」

「ま・・・まさか・・・」

2人は青ざめる。

そうアレに乗っているのは・・・

アンクの体（一応）だった。

「俺の体!!!!!!」

「アंक!!!待ってよ!!!」

アंकは弾丸の如くスピードで追いかけて行った。

・・・余談だが、そのせいで2人は新作アイスの試食会には参加できなかった。

めでたしめでたし・・・

「めでたくねえ————!!!!!!」

## (後書き)

どうも～～作者の爆睡で～～す！

今回は連載1周年を記念して読み切り書かせていただきました。

いやーやっぱ読み切りは難しい・・

想像以上にグダグダな話になってしまいました(涙)

ストーリーは6話～7話の間に起きたモノです。

なお黒髪に紫のアंकの身体兼人間体さんは皆さんもご存じの彼だったりします。

もしこちらの作品の連載を希望の場合はどしどしお便り下さい。  
お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8409o/>

---

仮面ライダー000～Strikers&反逆のアンク～

2010年11月11日18時53分発行